

問題・解答 用紙番号	34
---------------	----

の解答用紙に解答しなさい。

## 国 語

〈受験学部・学科〉

### 3科目型 受験者

### 3科目型と2科目型の併願受験者

法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、  
理工学部(住環境デザイン学科【理系型】・建築学科・都市環境工学科)、  
農学部【文系型】(食品栄養学科・食農ビジネス学科)

### 2科目型 受験者

法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、  
理工学部(住環境デザイン学科【文系型】)、看護学部、  
農学部【文系型】(食品栄養学科・食農ビジネス学科)

問題は100点満点で作成しています。

## I

1～5の傍線部と同じ漢字を含むものを、ア～オのうちからそれぞれ一つ選びなさい。(10点)

1 コウワ条約を結ぶ

ア 心から反省しコウセイを誓う

イ 授業で古典をコウドクする

ウ ハツコウした食品を撰る

エ 商品をコウニユウする

オ 雑技団のコウギョウを見る

2 病院爆破というボウキヨに出る

- ア 通行がボウガイされる
- イ 腹部がボウマンして苦しい
- ウ 課題にボウサツされる
- エ 言葉遣いがソボウになる
- オ 綿製のボウシをかぶる

3 豪華なチヨウドで部屋を飾る

- ア 参加費をチヨウシユウする
- イ 発表時間をチヨウカする
- ウ 力強いチヨウヤクを見せる
- エ 麓の街並みをチヨウボウする
- オ 子供のタイチヨウが回復する

4 主君の後を追ってジエンシする

- ア 公務中にジエンシヨクする
- イ 聖地をジエンレイする
- ウ ジエンカンキの検査をする
- エ 就業規則をジエンシユする
- オ 法令にジエンキヨする

5 ケンゴな要塞を築く

- ア ケンキヨな姿勢を大事にする
- イ 複数の役職をケンニンする
- ウ ケンジツな経営方針を立てる
- エ 家族はケンザイです
- オ 生活費をケンヤクする

## II

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

非ヨーロッパ世界に対する政治的干渉<sup>1</sup>や支配は、政治経済的な政策を通して、ヨーロッパ諸国が他のヨーロッパ諸国との競争において自国の利益を追求する中で進められていった。この意味で、ヨーロッパにおける国家の台頭と、ヨーロッパ諸国による非ヨーロッパ世界の「草刈り場」化は双対的な現象である。けれども、ここで確認しておきたいのは、このようなヨーロッパ諸国による世界進出の結果、「世界」という空間がどのような社会的な広がりや厚みをもった空間として現れたのかということだ。

ヨーロッパ諸国の非ヨーロッパ世界への進出と世界的な展開、とりわけポルトガル、スペインの後退後のイギリス、オランダ等の特許会社による三角貿易やプランテーション経営などの世界的展開は、近代<sup>A</sup>的な意味での「世界市場」の成立を意味していた。ここで「世界市場」という言葉は、マーケット・メカニズムを通じての交換経済が、個々の文明世界を超えて全地球的な規模で展開する場ということを意味している。「世界市場」とは、恒常的な形で世界の諸地域を結ぶ交換経済が、多数の参加者による原則的には自由な競争を通じて行われるような場所なのだ(むろん、これは多分に理念型的な理解であって、今日の経済摩擦にも見られるように、理想的な意味での「世界市場」はいまだどこにも存在していない)。このような世界市場は、すぐ後に見るように、人類史的に見てただ一度だけ、私たちが今検討している時代においてはじめて成立し、今日にまで及んでいる。

広大な領域を征服・支配する帝国や王朝は、ヨーロッパ諸国の世界進出以前にも存在していた。だがかつての帝国や王朝は、一六世紀以降のヨーロッパ諸国のように、世界市場を舞台とする貿易によって商業的な利益を追求したりはしなかった。なるほど、古代メソポタミアと古代インドの間ではなんらかの交流が認められるし、古代中国と古代ローマ、さらには古代日本と古代ペルシアの間にも正倉院御物に見られるような交流が存在していた。だが、こうした帝国間の朝貢交易を、近代的な市場交易と同一視することはできない。

「たとえば貢として財貨Aが諸方からかなりの距離を輸送して献上され、これに対して財貨Bが<sup>2</sup>下賜されたとしても、ただそれだけではなんら『市場』とは関係がない」し、「明らかに商取引が行われた事実があったとしても、それが単発的であるならば、これで市場の存在が立証されるわけでもない」(松井透『世界市場の形成』)からである。また、インド洋世界や東南アジア世界のよう<sup>2</sup>に地域市場が形成されていた地域も存在したが、そこでの交易は通商国家や港市国家のような緩やかに結びついた地域勢力に担われていたのであって、排他的な主権を主張する領域国家を背景とする重商主義的な政策がそこで展開されていたわけではない。

重要なことは、ヨーロッパ諸国がこのような非ヨーロッパ世界に進出し、拠点を築き、勢力下に



もつこの時計は、海上でも容易に経度を測定することを可能にした。本初子午線上の標準時に合わせたクロノメーターの示す時刻を航海中の現地時刻と比べることによって、経度を測定することが可能になったのである。

クロノメーターは、その比類ない精度によって世界のどこにいても同一の時間、同一の時刻を知ることができることを可能にすると同時に、経度という地球表面上の位置を表す座標軸を i 決定することを可能にした。かくして、クロノメーターを利用して時刻を計り、経度を測定する者にとって、世界は単一の時間と正確な経度をもつた、安定した時空構造をもつ、高度の可視性と可解性をもつ透明な空間として現れてくる。

クロノメーターの発明によってハリソンは、議会から二万ポンドの賞金を与えられた。知による世界の可視化は、国家によって報いられるのだ。そしてその知を手にした国家によって、世界は測定され、その可視性、可解性を高めてゆくのである。

大航海時代を経てリアリズム化し、科学化していった世界の地図は、そこで純粋な科学としての姿を現したように見える。だが、その実、その科学性と客観性は政治的・経済的な価値をもっていたのだ。古代帝国の自民族中心主義的な世界図が示すあらゆる政治性や神話性に代わって、世界を「客観的」に写し取る科学的な地図の透明さの内に、新しい形の権力や欲望が宿るのである。

こうして、一五世紀に始まるヨーロッパ諸国の世界進出を通して、「世界」はいくつものローカルな世界（＝地域的な社会や文明）の集まりではなく、地球表面上の単一の平面として現れてくる。むしろ、そこでは依然として様々な社会があり、異なった文化や文明が存在するが、いまやそれらはそれぞれに自足した「世界」を保ちつづけることが次第に困難となり、ヨーロッパ諸国を推進者とする「世界市場」の中で自らを位置づけ、他の社会との関係の場に引き出されてゆくのである。日本の近世における「鎖国」もまた、この世界市場との関係を限定化するという意味で、「近代的世界」への対応の一つの型であったということが出来る。鎖国という政策は、世界の中の孤立を意味するのではなく、他国との間の関係の特定化と限定化を意味しているのである。一九世紀半ばの開国は、近代的世界へとより積極的に関わり、自らも世界市場から利益を得ようとする、「世界」との関係の転換であった。

語の正確な意味での「世界地理」は、この時代に成立する。それ以前は、世界には互いにさほど密接な関係をもたない幾つもの社会や文明があり、それらの個々別々の歴史が存在していた。むしろ、文明や社会間の交流や交易は存在していたのだが、地球表面上を総体として対象とし、舞台とする活発な社会的交流や交易、交通は、この時代になってはじめて始まる。プトレマイオスの時代には ii 意味しかもたなかった「世界地理」が急速に社会的な意味をもち始め、多くの世界地図帳が出版される「アトラスの時代」<sup>\*</sup> になってはじめて、「世界という空間」は社会的な実践の場としての実定性をもち始める。科学的思考と測量という技術によってリアリズム化された世界と

それを行為の場とし、対象とする社会的な諸実践とが結びついて、近代的世界を確固とした社会的  
事実として存立させ、再生産してゆくのである。

「世界の歴史」を語ることも、このような実践の場としての「世界」の実定性があつてはじめて  
実質的な意味をもち始める。ここで「世界の歴史」というのは、地球上に有史以来存在してきた多  
くの社会の歴史を足し合わせたものとしての「世界史」ではなく、「世界」そのものを舞台とし、  
あるいは主体とするような「世界の歴史」のことだ。このような「世界史」は、世界が一つの巨大  
な関係の場として現れてくることなしには存在しえない。

近代が見出したこの「世界地理」の空間や「世界歴史」の時空もまた、近代以前の諸社会や諸文  
明の地図が表象する世界像と同じく、ある社会において世界というテキストを読み解き、言説化し  
た結果として現れる一つの社会的表象であり、社会的事実である。世界地理や世界史とは、客観的  
な事実として存在するのではなく、近代という社会が生み出し、制作するこの世界の中で発見され、  
その内部で思考されるのである。今、タイムズ社の『世界歴史地図』のような書物を見ると、私た  
ちはそれ以前にも私たちの知るような「世界地理」や「世界史」があつたような錯覚を覚える。そ  
こでは、紀元前からの人類の諸社会、諸文明の興亡が、一望可能な形で美しい地図に描かれている。

だが、そこに描かれた諸社会や諸文明の人びとにとって、自らが生きつつあつた「歴史」の時間  
や空間は、そのような「世界」の中に位置づけられていたのではない。そこでは人びとは、ローカ  
ルな「世界」を生き、その中に自らの行為や実践を位置づけていたのである。『世界歴史地図』に  
収められた美しい地図の数々を眺める時、私たちは比喩ではなしに文字通りの意味として、近代的  
世界という鏡の上に過去の世界を逆行的に映し出し、それを覗き込んでいる。けれども、その時鏡  
に映し出されるのは近代的世界に生きる私たち自身の世界観であり世界像、したがって私たち自身  
の思考の姿なのである。

地図的な視線はつねに、すでに他者とのコミュニケーションの可能性を内在している。世界地理  
の空間と世界史の時間の成立は、地図的空間に内在される他者たちの広がり、原理的には地球表  
面上のあらゆる時間と空間とを内包するものになつたことを意味しているだろう。このかつてない  
広がりや深さをもつたコミュニケーション可能性の圏域の広がり、世界市場の成立というかつて  
ない規模をもつた社会空間の成立を前提にしている。けれど、この広大な他者たちとの関係の空間  
には、「見るもの」と「見られるもの」、「支配する者」と「支配される者」という非対称な関係も  
また内在していた。「アトラス」が提示する世界の広がりやけつして透明な広がりではなく、視線  
と政治的・経済的な諸関係をめぐる非対称な力学の働く厚みをもつた媒質<sup>3</sup>なのである。

(若林幹夫『増補 地図の想像力』一部改変)

- \* プトレマイオス……二世紀ごろに活躍したギリシアの天文学者、地理学者、数学者。天動説を体系化した「アルマゲスト」を執筆し、経度・緯度を用いた地図の製作等を行った。
- \* アトラス……一六世紀末、オランダの地図製作者ゲルハルトゥス・メルカトルと息子ルモンドの手により完成された世界地図帳が『アトラス Atlas』という表題で出版された。メルカトル以後、「アトラス」は地図帳を指す普通名詞になった。

問一 二重傍線部1～3の言葉の本文中の意味として最も適切なるものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

1 干渉

- ア 他国の計画を把握する
- イ 他国の事情に口出しする
- ウ 他国の声明に反論する
- エ 他国の行動に与する

2 下賜

- ア 下位の者に重要な情報を告げる
- イ 高位の者に高価な品を贈る
- ウ 下位の者から金銭を受け取る
- エ 高位の者から品物を与える

3 媒質

- ア ある作用を伝える空間
- イ 両者の間を取り持つ方法
- ウ 変化や反応を促す物質
- エ 情報を伝達する手段

問一 空欄 i ・ ii に入る最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- |   |        |    |        |
|---|--------|----|--------|
| i | ア 一体的に | ii | ア 実践的な |
|   | イ 画一的に |    | イ 体系的な |
|   | ウ 一義的に |    | ウ 一時的な |
|   | エ 総合的に |    | エ 思弁的な |

問三 傍線部 A 「近代的な意味での「世界市場」について述べた次のア～オのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

ア ヨーロッパ諸国同士の競争における非ヨーロッパ世界への進出や三角貿易、プランテーション経営といった地域的展開が「世界市場」の成立を阻んだ。

イ 理念型的な理解での「世界市場」とは、多くの参画者による自由な競争を通して、持続的なかたちで世界の諸地域を結ぶ交換経済が行われる場所である。

ウ 広大な領域を征服・支配した古代の帝国・王朝の間でも、近代的な市場交易と同質の朝貢交易が行われていた。

エ インド洋世界や東南アジア世界における地域市場の形成は、緩やかな結びつきの地域勢力により担われていたが、近代的な「世界市場」と共通の性格を持っていた。

オ ヨーロッパ諸国が非ヨーロッパ世界を分割しながらも、その空間を普遍化することで「世界市場」が成立した。

問四 傍線部 B 「「知ること」が富を生み出す一種の「資本」として機能する」とあるが、このことについて述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

ア ヨーロッパの国王たちは、訪問先の経済活動などをできるだけ詳細に報告するよう冒険者らに求めることで、他国より多くの世界を知り、世界から多くの利益を得ようとした。

イ 新しい土地に関する知識を蓄積することは、商業的な利益の確保と国力の増進に寄与するものであり、地図はそのための枠組みとして機能した。

ウ 大航海時代以降のヨーロッパ諸国では、古代や中世とは異なり、世界に対する知への意志が地図を通して、利益や権力の獲得に結びついていった。

エ 比類ない精度を誇るクロノメーターの登場により、知による世界の可視化が進み、新たな利益や権力の獲得につながっていった。

オ 大航海時代を経て、より可視化されるようになった世界の地図には、科学性と客観性ではなく、利潤への欲望や権力への意志が宿っていた。

問五 傍線部C「近代が見出したこの「世界地理」の空間や「世界歴史」の時空」とあるが、近代における「世界」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 一五世紀以降のヨーロッパ諸国による世界進出により、「世界」はいくつものローカルな世界の集まりとして、それぞれに自足した存在であり続けていた。

イ 他国との関係を特定化・限定化するという意味で、日本の鎖国もまた、「近代的世界」への対応の一つの型として、世界における孤立を意味している。

ウ 「世界地理」が地球全体を覆う交流や交易などにより急速に社会的な意味をもち始め、「世界」という空間は社会的な実践の場としての性質を高めていった。

エ 世界地理や世界史は、実定性を伴わない客観的な事実としてのみ存在しており、近代社会が生まれ出し制作する世界の中で考えられている。

オ 紀元前からの諸社会や諸文明の興亡のなかで人びとは、近代と同じように一望可能な地図で描かれる「世界」の中に自らが生きる「歴史」の時間や空間を位置づけていた。

問六 次のア～オのうち、本文の内容に合致するものにはa、合致しないものにはbを、それぞれマークしなさい。

ア ヨーロッパ諸国による非ヨーロッパ世界の「草刈り場」化は、ヨーロッパにおける国家の台頭と裏表の関係にある現象である。

イ ヨーロッパ諸国の世界進出以前に広大な領域を征服・支配していた帝国や王朝は、世界市場を舞台とする貿易によって商業的な利益を追求した。

ウ 地球の緯度を測定するために開発されたクロノメーターは、キャプテン・クックの全ての探検航海に携行されたものであり、この時代の探検における知と権力の結びつきを表している。

エ 『世界歴史地図』を眺めると、近代的世界という鏡の上に映し出されるのは、過去の世界だけではなく、私たち自身の思考のかたちである。

オ 「アトラス」が提示する世界の広がりには、「見るもの」と「見られるもの」といった対称的な関係が存在していた。

### III

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

「忘れたということがどうして分かるのか。忘れてしまったならば、それはもう忘れてしまっているはずなのに」こう謎かけをしたのはアウグステイヌスであった。いかにも **あ** 問いたが、「分からない」ということに関しても似たような問いかけを発することができる。言うまでもなく、私には分からないことがたくさんある。だが、「分からない」ことがいかにしてありうるのか。分からないのならば、あるかどうかさえ分からないはずではないか。

もちろん、「分からない」ことが分かる単純なタイプの問題もある。たとえば、「千鳥ヶ淵の桜はいま何本あるのか」。私は知らない。だが、それは何か定まった数だと考えている。だから、私には分からなくとも、何か答えがあるはずである。このような問いを「事実の問い」と呼んでおこう。この意味でならば、私は確かに、自分が知らないことが山ほどあるということを知っている。

だがいま問題になるのはこのような問いではない。<sup>\*</sup>『メノン』の一場面を思い出そう。メノンはソクラテスに徳がどのようにして備わるのかを尋ねた。それに対してソクラテスは、そもそも「徳」とは何なのかと問い返した。「徳」の意味が分からないのであれば、それがどうやって身につくのかなど答えられようはずもない。ところがこれに対してメノンは、「徳」が何を意味するのかも知らないのであれば、どうやってそれについて探求すればよいというのか、と尋ね返す。「探求のパラドクス」と呼ばれる問題である。ここで問題になるタイプの問いを、先の事実の問いに対して「意味の問い」と呼んでおこう。

また奇妙な思考実験であるが、王が奇病にかかり一人の祈祷師が呼び出されたとする。その結果「この病にはアブアブが効く」というお告げがあった。そこでさつそく学者が呼び集められ、「アブアブはどこにあるのか調べよ」と命じられる。ところが誰ひとりとして、その祈祷師さえも、「アブアブ」が何を意味するのかを知らない。そこで学者は恐れ多くも尋ねる。「そのアブアブとは何なのでしょう」。大臣は怒って言う。「だからそれを調べろと言っているのだ」。実に、あからさまに、無理な注文である。

哲学の問いは基本的にこのような<sup>a</sup>理不尽な構造をもっている。ワイトゲンシュタインが「哲学の問題は〈私は途方に暮れている〉という形をとる」(『哲学探究』、第一二三節)と言ったのも、それゆえにはかならない。その分からなさは、まさに自分が何について分からないでいるのかが分からない、途方に暮れざるをえない分からなさなのである。だとすれば、メノンによつて提起された探求のパラドクスも、たんなる悪い冗談ではないということになる。

それゆえこんどは真剣に問おう。「分からない」ことがどうしてありうるのか。

先のアブアブの例はどうしようもなく理不尽な問いであった。もし意味の問いがすべてこのようなものであったならば、それはやはり問いとしては成立していないと言わざるをえない。では逆に

哲学であれ、日常的な場面であれ、意味の問いが問いとして成立しえているように見えるのはどうしてなのだろう。たとえば、「時間とは何か」と問う。あるいはもつと日常的に、ある人の言っていることの意味が分からないと思う。あるいはまた、彼女がふいに私に向かってペンを振ってみせたことの意味が分からないと思う。こうした場面における「分からなさ」はどのようにして姿を現してくるのか。

ポイントは、「アブアブ」の場合とは異なり、「時間」という語も、ある人の発言も、行為も、それ単独で孤立して与えられているわけではないということにある。それは他の言葉、他の発言、他の行為と連関しあっている。いや、そうではない。もつときちんと言おう。そうした連関性をつかみとることこそ、意味の問いの課題にはかならない。とすれば、その分からなさにおいて、私はそれが他のものたちと何か連関しあっているだろうと期待しているのである。それが単独で孤立しているのであれば、それに対して意味の問いを発することにポイントは無い。それゆえ私は、彼女の行為の意味が分からなかったと感じることにおいて、その行為をあくまでも他の発言や行為と関連しあつたものとして捉えようとしている。別の言い方をするならば、それがなんらかの意味ネットワークの内にあるものと期待しているのである。

こうした事情がもつとも極端に現われるのは、「根元的解釈」と呼ばれる状況である。たとえば未知の惑星に行き、生命体と覚しきものたちの、コミュニケーションと覚しきふるまいに出会つたとする。ある一体がその口のようなものを開き、「ギー・ル・ププツ」と音を発する。他の一体がそれに応じるようにして「ゲケン・ロツ・ペー」と音を発する。分からない。それはいつた言葉なのだろうか。そこにはなんらかの意味の秩序があるのだろうか。

彼らのふるまいに意味の秩序があるのかどうか、けつきよくのところそれは、われわれが彼らのふるまいに意味を読み取れるのかどうかにかかっている。言語だということを確認してからその意味を探るのではない。認識論的には順序はまったく逆で、ともあれまず意味を探り、その意味の探求が順調に進行するならば、それが言語であるという期待も強化される。もし意味の探求が挫折し、諦められてしまったならば、つまり X ののである。

ここには、ある種の「分からなさ」に見てとられるべき重要な特徴がある。問題は他者がもっている意味の秩序である。それが私には分からない。だが、それがいかなる秩序であるのかが分からないのであれば、それがそもそもなんらかの秩序をもっているのかどうかも分かりはしない。それゆえ、私が他者に向かって「分からない」と言うとき、私はそれによつてむしろ「いつか分かるかもしれない」という希望を表わしている。未知の惑星の生物であれ、日常的に接する隣人たちであれ、そこに開ける「分からなさ」は、彼らがそれでもきつとなんらかの意味の秩序をもっているに違いないという、私の彼らに向けての い 希望に支えられているのである。

未知が既知に変わる。その転回点はどのようにして訪れるのだろうか。たとえば未知の惑星の者

たちが「ギー・ル・ププツ」<sup>1)</sup>と音を出す。それがどういう意味であるのかを、そしてそれゆえ、それが確かに意味の秩序をもったものだということ、私はどうして知るのだろうか。

ひとつの仕方は翻訳である。彼らの音を、それが言語であり無意味な雑音ではないという希望のもとに、われわれの言語へと翻訳しようとする。そのためにさまざまな発話、発話状況、それに伴うふるまいをデータとして収集し、仮説的な翻訳理論を立て、チェックし、翻訳理論を改良していく。それは地道な、かなり時間のかかる作業だろう。だが、いまはその作業の詳細は問題ではない。問題は、もしそれが翻訳であるならば、たとえそれが成功したとしても、その結果開けてくるのはけつして私にとって新しい秩序ではない、という点にある。「ギー・ル・ププツ」が「今日はなんて暑いんだ」と訳されたとする。それはけつきよく、彼らの言語的秩序を日本語という言語的秩序に重ねることではない。あるいはまた、たとえば「他我の統覚は根源的呈示によつては充実不可能である」などという哲学的言葉を、かりに「他人の体験を私が体験することはできない」という日常的な言い方に翻訳したとする。しかしそれがたんなる翻訳にとどまっているのであれば、けつきよく、私がかつていたことに翻訳することで一見分からなかったものを分かるようにしたというにすぎない。

翻訳は、意味の問いという観点からすれば、未知を新たな知へと転回するものではなく、旧来の既知へと解消することによって Y ことではないのである。それゆえ、いま私はむしろ翻訳ではないような新しい知への転回を求めたい。実際、そのようにして私は成長してきたはずなのである。理解が翻訳であり、それゆえ翻訳の基盤となる母語が用意されてあるものしか理解できないというのであれば、私自身の言語的秩序は幼児の頃から、いや生まれたときからいささかも変化も拡大もしていないということになってしまうだろう。

それゆえ、「分かった」というその瞬間は、私の既存の理解の基盤に相手を取り込んだということではなく、私の理解の基盤そのものが相手を理解することに向けて変化したということの意味していなければならない。そこにおいて他者理解とは、自分自身が他者に向けて変化することを伴うのである。この他者理解と自己変化の相即的過程はどのようなものなのだろうか。

再び\*「規則のパラドクス」の場面に戻ろう。ワイトゲンシュタインは数列を学ぶことができない子供の例を出し、クリプキは足し算を学べない人の例を出した。そのような者たちを、クリプキに敬意を表して「クワス人」と呼ぶことにしよう。たとえば自然数の列をクワス人に教えようとするところが、教師の手を離れて新たな局面に入るとどうしてもそのクワス人はわれわれとは違うやり方で数列を展開してしまう。クワス人には何が欠けているのか。ワイトゲンシュタインが示したように、クワス人に欠けているのは知性ではない。むしろクワス人の困難は、教師とは異なった「本能」をもつてしまっている点にある。それゆえ、まずクワス人に対して為されねばならないのは、可能ならば、行動傾向をわれわれと同調させるような訓練なのである。つまり、自然数を「頭で理

解させる」のではなく、自然数を口ずさむという身体運動において、われわれとシンクロした形で身体が動くようにクワス人をトレーニングしなければならない。

そして私が最後に示唆したい論点は、おそらくアナロジーの基礎もここにあるだろう、ということである。

たとえば、「電流」という新しい概念を学ぶとき、それを「魂」のようなものになぞらえるか「水流」になぞらえるかは異なるアナロジーである。それぞれがその目的に応じて異なった納得の仕方を生むだろう。だが、私のように「魂」に対してクワス人的である者には、魂のアナロジーは無益でしかない。かといって逆に、アナロジーの同型性があまりにも緊密であったとしても、それはアナロジーの役を果たさない。完全に同型の場合には、たんに一方を他方に翻訳したにすぎないものとなる。生産的なアナロジーにおいては、その翻訳関係はむしろ可能なかぎりゆるいものでなければならない。一般に、アナロジーを翻訳関係ないその亜種と捉える見方はアナロジーをつまらないものにしてしまうだろう。

ここにおいてポイントは、論理構造の対応関係よりも、むしろ身体的な可動性にある。スキーになじんでいた人の方がスノーボードにも早く熟達するように、「水流」の概念体系を自由に往来できている人こそが、いわばその身体感覚をもとにして「電流」の概念体系により速やかになじむことができる。このように、新たな知を支える本能を呼び覚まし、活性化させること、それがとりわけアナロジーの役割なのではないだろうか。

実は、これは日常のコミュニケーションにも潜む仕掛けにほかならない。日常のコミュニケーションにおいて相手の発言の意味が問われるとき、ひとつのやり方としては、それを自分の言葉に翻訳して理解する。だが、それだけではない。しばしば起こる、そしてより重要な場面として、自分の意味ネットワークをもとにして相手の意味ネットワークをアナログカルに学習する、ということがある。コミュニケーションのなめらかさは、この学習の容易さに裏打ちされている。ときにわれわれは、ほとんどコミュニケーションの流れを遮断することなく、柔軟に、瞬時にして、相手の意味体系を学習するだろう。

なんらかのボードゲームに習熟している人の方が新しいボードゲームを容易に学ぶだろうようにある言語ゲームを学習するのに、私がすでに習熟しているある種の言語ゲームが役に立つことがある。そうして私は、他者が提示した未知の言語ゲームへと踏み出していく。このアナロジーのジャンプに身体がついていき、未知の空間で自由に動けるようになったとき、私は「分かった！」という言葉を発する。アナログカルに言うならば、ギプスはずした人が脚を動かそうと試み、「動ける！」と言つのと違いはない。

(野矢茂樹『他者の声 実在の声』一部改変)

\* 『メノン』……古代ギリシャの哲学者プラトンによる対話篇の一つで、副題は「徳(アレテー)について」である。「徳は人に教えられるのか?」という問いを中心に、知識や学びの本質についてソクラテスと若者メノンが対話を通じて探究する。

\* 「規則のパラドクス」……ウイトゲンシュタインの『哲学探究』における例は、以下の通り。

教師は生徒に2, 4, 6, 8...という数列を教え、生徒は1000まで正しく続けたとする。しかし1000の次に、生徒は突然1004, 1008, 1012...と続けてしまう。教師が「同じように続けなさい」と言っても、生徒は「私は同じようにやっている」と答える。生徒にとっては、1000を境に「+4」に変わることこそが、「教えられた」規則なのである。有限個の例からは規則を一意に決定できないということを「規則のパラドクス」は示している。

問一 二重傍線部 a ～ c の本文中の言葉の意味として最も適切なるものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

a 理不尽

b 相即

ア 論理的でないこと

ア たがいに打ち解け合うこと

イ 議論が十分でないこと

イ 悟りを開いていること

ウ 道理に合わないこと

ウ 背中合わせであること

エ 理由がないこと

エ 一体となっていること

c 亜種

ア 元のものよりもレベルが劣るもの

イ 同一の種のうちで一定の違いを持つもの

ウ 元のものと同じと置き換えられるもの

エ あるものと似ていながら少し違うもの

問二 空欄 あ ・ い に入る最も適切な言葉を、次のア～オのうちからそれぞれ選びなさい。

あ ア シビアな

い ア 大げさな

イ トリックシーな

イ ばらばらな

ウ センシティブな

ウ やみくもな

エ デリケートな

エ でたらめな

オ クリテイカルな

オ むりやりな

問三 傍線部Ⅰ「分からない」ということ」について述べた次のア～カのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

ア 「事実の問い」においては、答えが分からないものの、何か答えがあるはずということは分かっている。

イ 「事実の問い」の場合とは異なり、「意味の問い」においては、「分からない」ことも分からない。

ウ 「意味の問い」では、答えが分からないような問いがたくさんあるということだけは分かっている。

エ 『メノン』において、ソクラテスは「徳」が何かを知らなくても、それを探求することはできると主張した。

オ 『メノン』において、「分からない」ものは探求できないため、探求が不可能であるということが主張されている。

カ 「探求のパラドクス」と「アブアブ」が分からないということでは、「分からなさ」において共通性がある。

問四 傍線部Ⅱ「意味の問いが問いとして成立しえている」ことについて、筆者はどのように考えているのか。次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

ア 「アブアブとは何か」という問いと「時間とは何か」という問いでは、分からなさに違いがある。

イ 「意味の問い」が成立するためには、あらかじめ求めるものがなんらかの意味ネットワークの内にあることが分かっている必要がある。

ウ 「根元的解釈」と呼ばれる状況では、意味の探求がうまく行く場合もあれば、うまく行かない場合もある。

エ 異星人と覚しきものの「ギー・ル・ププツ」という音に意味があるのかどうかは、われわれが彼らのふるまいに意味を読み取れるかどうかにかかっている。

オ 「意味の問い」が成立するのは、他者の持っている意味の秩序がいつかは分かるかもしれないという希望がある場合である。

問五 空欄  に入る最も適切な言葉を、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア それはわれわれに分からない言語だった
- イ それは言語ではなかった
- ウ われわれの力が足りなかった
- エ われわれの意味ネットワークとは異なっていた
- オ それは単独で孤立したものであった

問六 空欄  に入る最も適切な言葉を、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 未知を闇に葬る
- イ 既知の秩序をより安定させる
- ウ 未知に蓋<sup>かぶ</sup>をする
- エ 既知とのつながりを断つ
- オ 未知を骨抜きにする

問七 傍線部Ⅲ「アナロジーの基礎もここにある」とあるが、アナロジーとその基礎について、筆者はどのように考えているのか。次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 自然数を口ずさむというような身体運動にアナロジーの基礎は存しているが、異なった「本能」を持つクワス人にそれをトレーニングすることは不可能である。
- イ 新しい概念を学ぶとき、自分にとって同調することができないようなアナロジーを用いた場合、それを翻訳することになってしまう。
- ウ 「水流」の概念体系に身体的に馴染んでいる人にとっては、「電流」概念と「水流」概念の間の論理構造が似ていることがより速やかに分かる。
- エ 日常のコミュニケーションにおいて、相手の意味ネットワークをアナログカルに学ぶことで、相手の発言を自分の言葉に置きかえられる。
- オ すでに習熟している意味ネットワークがあれば、ギプスをはずした人が脚を動かせるのと同様に、新しい意味ネットワークが容易に理解できる。